

令和7・8年度
「ちばっ子の学び変革」
推進事業研究状況報告

「算数科学習」



学校マスコット
くすによつき



市原市立
国分寺台西小学校

目次

- 1 学校概要
- 2 本校の児童実態と課題
- 3 研究主題と仮説
- 4 少人数指導の取り組み
- 5 同一学年、学級との学び合いの取り組み
- 6 研究の成果と課題

学校概要



昭和57年に開校し、44年目を迎えた学校である。校庭の中央には樹齢約140年の「くすの木」が開校年度より児童を見守っている。

市原市の中心部に位置し、近隣には市役所やショッピングセンターがある。また、地域と連携し「納涼祭」や「餅つき」の行事等も開催されている。

472名の児童は、学校教育目標である「進んで学び 心豊かで たくましく生きる」を目標に学校生活を送っている。近年では、少子化により、クラス数が減少傾向にある。

本校の児童の実態と課題

○令和7年度全国学力・学習状況調査

主体的・対話的で深い学びに関する質問調査では、**全ての質問において、本校は全国平均を上回っている**。特に「5年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる」と回答した児童の割合が全国平均よりも高かった。しかし、「算数の授業の内容はよく分かる」と回答した児童は、全国平均よりも低かった。

算数の調査結果では、基本的な計算を苦手とする児童が多い。**ほとんどの分野において、全国・県ともに平均を下回っている**。

研究主題と仮説

【研究主題】

自分の頭で考え、自分の言葉で表現できる児童の育成
～自分で考え、自分から取り組む児童を育成するための
授業改善を通して～

【研究仮説】

- ①単元によって**習熟度別**と**等質**の少人数指導を**工夫して使い分け**れば、基礎学力が向上し、課題の解決に進んで取り組む児童が増えるだろう。
- ②「自分の考えをノートに書く、友達に自分の考えを伝える」活動を**継続**※し、**対話的な活動を取り入れ**れば、児童相互が関わり合い、自分の言葉で表現できる児童が増えるだろう。 ※令和6年度から校内研修で取り組み中

少人数指導の取り組み

【単元によつての習熟度別と等質クラス】 3年生～6年生

・算数科の年間教育課程を計画

6年生 **習熟度クラス** (分数÷分数※5クラス展開)

計算領域を
中心に

5	分数÷分数	○単元とびら 1 分数でわる計算	1	56
			2	57
			3	58
			4	59

①習熟度別クラス

②1組30人2組20人3組20人4組10人5組10人

※2～3名程度の人数の変更は可

6年生 **等質クラス** (円の面積※4クラス展開)

図形領域を
中心に

9 上 (6)	7 円の面積	○単元とびら	1	88
			2	89
			3	90
			4	91

①等質クラス

②4クラスで実施

③TTの職員は、日ごとにクラスを変更するか、特定の児童に付く。

<おうぎの形>

【3年生 **習熟度別** 授業風景】 ※通常1クラス約30人

1・2組 約30人展開



3組 約20人展開



4・5組 約5～10人展開



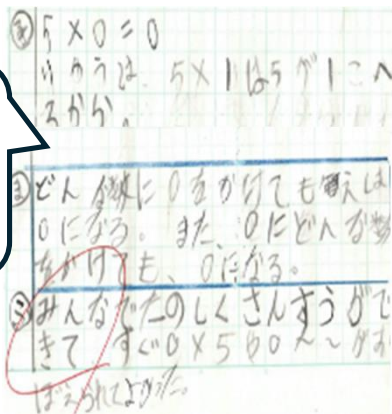
同一学年、学級との学び合いの取り組み

【抽出児童ノート①】 3, 4年生

※ノートの変容

3年生C児

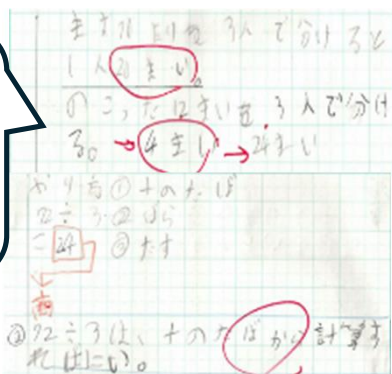
5月



文章が
まとまって
いない

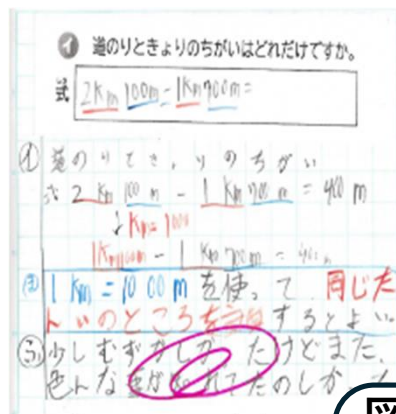
4年生C児

5月



わり算の仕
方について
理解してい
ない

7月

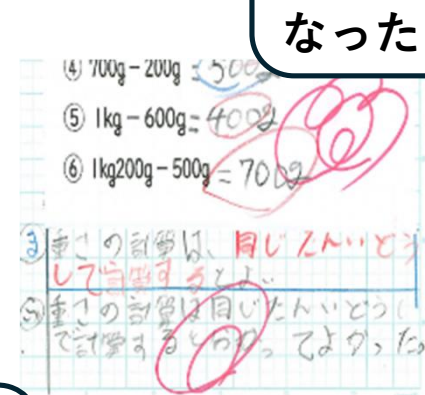


7月

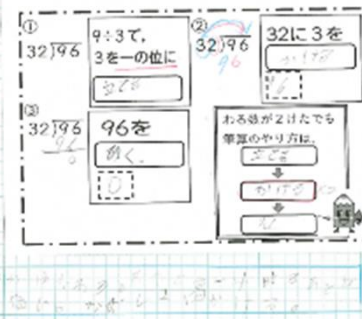


図や言葉で筋
道立てて説明
しようとする
姿が見られた

10月



10月



色分けをして
分かりやすく
かけるよう
になった

アンケートを実施 学習意欲からA児B児C児各学年3名を抽出

【抽出児童ノート②】 5, 6年生 ※ノートの変容

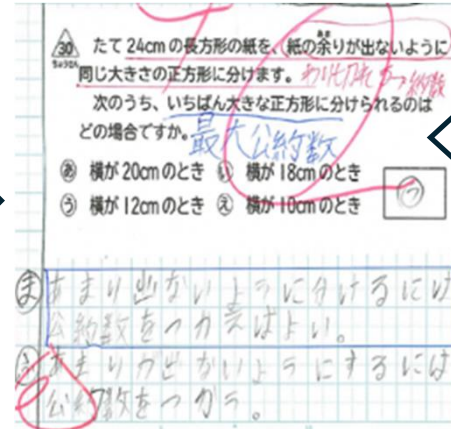
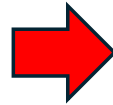
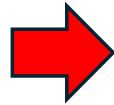
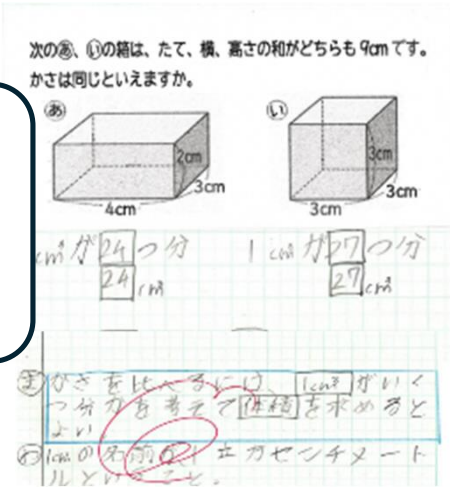
アンケートを実施
学習意欲からA児B児C児各学年3名を抽出

5年生B児 5月

7月

10月

自分の
考えを
かくこと
が苦手



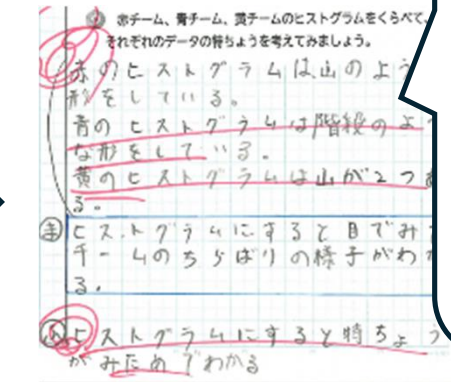
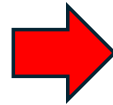
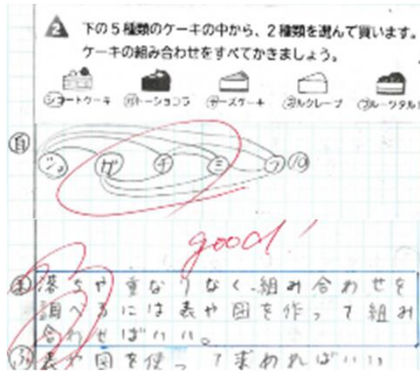
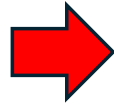
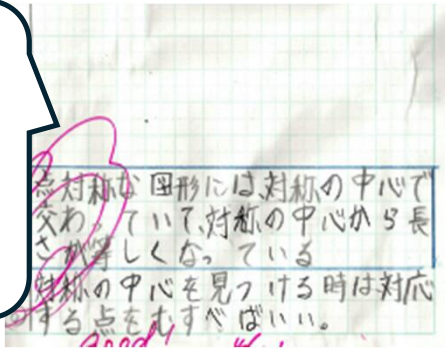
大切だと思
うことに色
を付けてメ
モすること
ができるよ
うになった

6年生C児 5月

7月

10月

まとめと
振り返り
のみ自分
の言葉で
かける



気づいたこと
を複数かか
なくなど、
より多くの
言葉で表現
できるよう
になった

○研究成果と●課題

・仮説①

「習熟度別クラス」

○算数を苦手としている児童への指導に時間をかけることができた。

○個のつまずきに応じた支援を行ったことで、児童の意欲向上が見られた。

昼休み等にも進んで教えてもらいたい児童が職員に声をかけてくるようになった。

○発展クラスにおいては、児童の実態や関心に応じて課題設定を行うことで、より多くの問題や発展的な内容に取り組むことができた。

「等質クラス」

○解き方を考えられない児童や、考えを文章化できない児童が、友達の考えにふれることで自身の思考や表現の参考にすることができた。

●図形領域を等質クラスで行ったが、基礎基本の十分な定着には課題が見られた。

●単元の中でも、学習内容によって習熟度別クラスと等質クラスに分かれる指導形態の工夫が必要と考える。

・ 仮説②

○ICTを活用する場面を工夫しながら発表することで、自分の言葉で発表する児童が増えた。

○「自分の言葉で表現ができる」ためにA児・B児・C児と各学年3人を抽出し、**変容を記録**したことで、何に躓いていて、どのような学習を取り入れればよいか確認することができた。

※A児（意欲が高い） B児（普通） C児（意欲が低い）

●自分の考えを伝えることができている児童は増えてきているが、**文章化して書くことができない児童が多い。**

●自分の考えを伝えることはできるが、**友達のことを聞き理解して伝えられる児童が少ない。**

●良い考えを聞いたときに、**理解するまでの時間に大きな差があるので、手本となる発表の時には、どこが良かったのかを教師が具体的に伝える必要がある。**